

# 「長崎華僑時中小学校」沿革小史 その一

増 田 史 郎 亮

## A Short History of Nagasaki Overseas—Chinese Jichu Primary School, Part 1

Shirosuke MASUDA

Department of Pedagogy  
Faculty of Education

### は し が き

本稿は長崎市大浦町36番地にある「長崎華僑時中小学校」の沿革小史である。先にも述べるように、まだ判らぬ所も多く、今の所、中間報告的なものに止めざるを得ず、他日を期したい。

現在の時中小学校の言わば門標には「長崎華僑時中小学校」とあり、本稿は其の門標通りに従ったが、言うまでもなく「華僑」(OVERSEAS-CHINESE)というのは、一般に海外に移住し、在留した、又はしている中国人および其の子孫を言うが(1),『隋書』の食貨志によれば、東晋の元帝時代(A.D.317～322年),北方から南方に移住する人々を「僑人」と呼び、彼等「僑人」はみな新しい移住地に故郷の名をとって郡・県を「僑立」したとあり(2),「華僑とは、このような歴史的意味合いをこめて海外で生活する中国人の名称となったのである。」(3)。僑とは「高く抜き出てひとりだちする人の意」が其の本来の意味で、其の意味が「転じて、他郷で自活する人のこと」であり(4),「海水到るところに華僑あり」とも、また「一本のヤシの木の下には三人の華僑が住んでいる。」とも言われて居ると言う(5)。

時中というのは『中庸』の第二章に「君子の中庸は、君子にして時に中す。」(君子之中庸也、君子而時中。)の時中から出て居り、この時中というのは「時に随い変に処し、その宜しきに叶う。」「時に随いて宜しきに処すること」、または「時に随いて其の宜しきを得る。」という意味とされる(6)。

所で、筆者が時中小学校(以下、時中小学校と呼ぶ)の沿革史を調査してみようと思ひ立ち、同校を訪問したのは、十数年以前の事であった。教育史は筆者の専門分野の一つでもあり、筆者には昭和41年と昭和51年にそれぞれ共著ではあるが、『長崎県教育文化史』、『長崎県史 近代編』があり、その他、長崎関係や中国教育史関係の教育論文も数編ずつあって、地元の事に無関心であったのではないが、当時、時中学校の事に言及した著書、郷土史は、あっても極く僅かで、しかも殆んどが簡略、その背景ともなる長崎の華僑社会に触れた著書もまた然りで、これでは時中小学校を訪問したが一番捷径とばかりに訪問した次第であった。その折、徐玉如校長が同校の沿革史に手を初めて居られるやにお聞きし、

その折は当時同校で使用中の教科書を多数頂戴して辞去したのを今に思い出すのである。御多忙な徐先生を煩わすものと遠慮して、そのままになり、数年前、コクラヤギャラリーで教科書・通知表展を開催した折、時中小学校の通知表・教科書の展示をお願いに参上して学校側の御快諾を得た時も、徐先生御静養中だとかで、この折も筆者は訪問したい気持を押えながら遠慮して現在に至ってしまった。このような事情で、今まで筆者は諦め切れずにいたのであるが、今年開講した公開講座「初心者のための漢詩の鑑賞」の受講生の方々と長崎市内の教育史的遺跡の散歩を最近試みた事が縁となり、その散歩の道筋の一環ともなる時中小学校に事前調査に訪問した際、同校在学者数の激減を知って驚く一方、同校の御世話で、同校沿革史を調べて居られる官文秀氏（中華料理店・天々有支店長）ともお逢いする事も出来、官氏より色々と資料を紹介して戴いて、筆者も研究上勇気づけられた次第である。先にも述べたように、同校在学者数の激減は筆者には驚きであった。数年前、筆者が訪問した時は、確か三クラス編成であったと記憶しているからである。官氏も同校の卒業生で、氏もまた、在学者数のあまりの激減に、その間の事情を探るために時中小学校の沿革史研究・調査に手を初め始められたとも氏より筆者はお聞きした。これらの事どもも込めて、これらから筆者も亦、触発され拙稿を思い立ったと言うべきであろうか。こういう機会を作って戴いた学校当局、官文秀氏に筆者は深謝したい。唯、只今まで筆者が調査した範囲で残念に思う事は、不明な点が色々あるが、特に教科書、カリキュラム、在学者数、卒業生の動向などが未だに明白に掘めずにいる事である。在学者数、卒業生の動向については官氏より一部資料を戴いて居るし、これは追い追い時間をかければ判って行こうが、教科書、カリキュラムに関しては只今にも知りたい所である。この方は長崎市立博物館所蔵の「泰益号関係資料」一覧に学校教育関係資料にある程度含まれているようなので、先日、博物館に問合せしたら、只今整理中との事、筆者のために急いでみましょうとの杉村邦夫館長さんの有難い御言葉であったが、館長さん、館員さんの御多忙の様子であったので、無理をお願いせず、他日に期する事とした事を予め断って置く。

一。

時中小学校が創設されたのは明治38（1905）年であるが、その背景ともなるそれまでの長崎華僑社会の状況はどうであったか、その大体の様子を先ず覗ってみよう。

1859（安政6）年の長崎の開港は、唐人屋敷の性格に大きな変化をもたらした。本来、唐人屋敷は風紀取締上、密貿易防止、切支丹取締上等の諸点から、貿易のため来航した中国人を悉く其の内部に閉じ込めて日本の民間人との接触を絶つために建てられたものであった。然し、開港と共に多数の中国人が欧米人の船舶に便乗して来航するようになると、幕府は従来中国人に対して有していた統制力を失ない、中国人が唐人屋敷外の外人居留地に居住し貿易を行なうのを阻止できなくなり、かって厳重を極めた唐人屋敷入口の警備も有名無実となり唐館への自由な出入りも黙認されるようになった<sup>(7)</sup>。そればかりでなく、さらに1868（明治元）年、唐館の門限の廃止、差配役の詰所廃止が行なわれ、唐館内の地所が希望者に貸渡されるようになると、益々唐館の閉鎖性は解除・打破され、唐館の老朽化、唐館敷地の狭小化とも相俟って、中国の人達は唐館前方の広馬場や、唐館内の中国商人のための倉庫用地として、唐館設立後間もなく埋め立てられて出来た人工陸の新地（1702－元禄15年完成）および条約国民の居留地に指定された言わば新開地の大浦・浪平地

域一帯をも自分達の居住地とするに至ったのである(8)。幕末より明治初年にかけての長崎華僑の動向を綿密かつ精力的に調査された長崎大学名誉教授、菱谷武平先生の表現をお借りするならば、長崎華僑の人達は奥地化した古い唐館から脱出し、広馬場、新地、大浦・浪平地域に進出した訳である。諸資料によれば長崎華僑社会の人口数は大要以下の通りである(9)。

		唐館	広馬場	新地	大浦・浪之平	不明	合計	居留白人	神戸華僑
1868(明治元)	年	236	0	222	286	0	744	195	240
1869	〃 2	97	0	78	242	121	505	170	
	70 〃 3	25	0	111	292	22	? 462	177	
	71 〃 4	7	15	133	163	28	? 447(150戸) ? 346	131(117戸)	
	72 〃 5	6	2	118	81	66	? 273		
	73 〃 6	39	0	151	30	50	? 270		
	74 〃 7	0	131	215	240	0	708		
	75 〃 8	0	126	258	334	0	717		
	76 〃 9	0	123	2	183	0	? 308		
	77 〃 10	0	131	283	158	0	? 582		
	78 〃 11		43	313	117	0	473		
	80 〃 13			286	292	0	578		
	82 〃 15						600余	? 229	
	89 〃 22						701	354	
1918(大正7)							899(215戸)	276(99戸)	
	19 〃 8						805	286	
	20 〃 9						841	281	
	22 〃 11						891	243	
	24 〃 13						937	210	
	26(昭和元)						1,047	200	
	28 〃 3						1,026	169	
	30 〃 5						1,070	170	
	32 〃 7						839	161	
	34 〃 9						1,006	186	
	36 〃 11						1,175	209	
	47 〃 22(以後、外国人登録法により、また台湾省人も含む)						617	82	
	48 〃 23(法務庁国勢調査室調によれば各省人840名,台湾省人179名)						733	178	
	49 〃 24						768	77	
	50 〃 25						783	84	
	51 〃 26						803	173	
	52 〃 27						739	81	
	53 〃 28						779	73	
	54 〃 29						739	79	

以上は註(9)で挙げた諸書の資料で合成したもので、年代の抜けている所が随所にある事も筆者には判って居り、それを埋めるであろう資料の所在も筆者には既に予想がついているが、今の所、これは他日に期せざるを得ない。不十分な表ではあるが、これで唐館よりの華僑の人達の広馬場、新地、大浦・浪之平への脱出の様様、華僑と居留外人との人口動態の比較がある程度、推定出来ようか。なお、表中、?とあるのは基礎資料が色々あって、記載の疎密、記録の不備などがあり、原著者の方で一応合計欄は形式的に記入してあるものの、疑問のヶ所に?を付してあるものを、そのままに?としたものである事を断って置く。また、明治4年の合計欄が?447(150戸)と?346となっているのでは、違う著者の分をそのままに出したものである。これも併せて断って置く。

以上で、華僑の人達が唐館より、広馬場、特に新地、大浦・浪之平への脱出した事が想見出来、居留白人に数倍したという事が推測出来ようか。

なおまた、蒲地典子氏は以下のような人口動態を表にして居られる。これも参考資料として以上の表に関係ある分だけ掲げて置こう。

		外国人総計居留地内		中国人合計	中国人口			
					唐館	新地	居留地	不明
1868(明治元)年		484					296	
	〃	546	(814)	237			362	
	〃	491				215	286	
69	〃 2	562					368	
	〃			105	80	111		
70	〃 3		462	22	196	219	25	
	〃	553					366	
74	〃 7		685		213	340		
77	〃 10		578		286	292		
80	〃 13	767	549					

以上の表で同年で数の出し方が三通り、または二通りあるのは著者によれば、基礎資料の違いからであり( )は推定値という由である(10)。

以上に關連して、菱谷武平氏によれば、明治元年の唐館・新地の性別・年齢構成は以下の通りであったと言われるが、これも参考資料として掲げて置きたい。

年 齡	唐館居住華僑				新地居住華僑			
	総数	男	女	比率	総数	男	女	比率
0～ 9	30	23	7	12 %	23	(23)		11 %
10～19	28	21	7	12 %	13	10	3	5 %
20～29	42	35	7	17 %	51	48	3	24 %
30～39	50	34	16	21 %	56	52	4	26 %
40～49	42	34	8	17 %	42	39	3	20 %
50～59	29	25	4	12 %	18	17	1	8.4 %
60～69	13	10	3	6 %	5	5	0	2 %
70～79	5	4	1	2 %	0	0	0	0
80～89	1	1	0	0.4 %	1	0	1	0.5 %
不 明	2	1	1	0.8 %	4	4	0	1.9 %

山本紀綱氏の言われるように、以上のような老若男女に分かれた人口構成であることから、長崎華僑社会が鎖国時代の稼働力を中心としたであろうと思われる出稼の人口構成から漸次ノーマルな人口構成に移行しつつある事を以上の表は示唆していると見てよいであろう(11)。

所で、長崎華僑の人達の出身地、職業はどうなっていたか、これも或る部分解明されているのでそれを紹介して置きたい。

蒲地典子氏は論文で明治3(1870)年と明治10(1870)年のそれを比較して居られるが、それによると明治3(1870)年においては、福建省者が最大多数で、次が広東省、これにつぐのが江蘇・浙江・安徽省出身者で、福建人が唐館、広馬場、または新地に居住したのにたいし、広東人は殆んど大浦・浪之平に住み、江蘇人・浙江人・安徽人は両地域に分散居住したと報告され、これは旧幕時代の友映だろうとされている(12)。旧幕時代の長崎貿易に参加した商人および乗組員は福建人および浙江人で占められており、広東人の多くは欧米人の船舶に乗って来崎し、唐館およびその隣接地に足場をもたず、新開の外人居留地に落つき先を見いだした事情にそれはよるものであらうとされる(13)。

職業分布では一番多いのが商人の傭工、次に多いのが商人、それに次ぐのが木匠、鉄匠、皮靴匠、裁衣匠、油漆匠、修髪匠等の職人およびその傭工で、商人とその傭工は各域に平均分散していたのに対して、職人およびその傭工は大浦・浪之平に集中し、職人は全て広東人であった由である(14)。

明治10年(1877)年では、福建人がいぜんとして最多数を占め、広東人・江浙人がそれに続き、職人はいぜんとして大浦・浪之平に集中しており、傭工が多く、その殆んどは広東人で商人の殆んどは新地および広馬場に住んで長崎華僑人口の約半数を占めていたという(15)。当時、広東人すなわち大浦・浪之平の傭工というイメージが定着していたらしく、上記の事はそれと裏腹をなすものであるとされる(16)。

なお、明治3年に比して明治10年は多種の職業が記録されて居り、糕餅店、麵店、茶楼、医士、葯店、読書館のような中国社会内の日常生活の必要を充すためのサービス業が存在していた事は(17)、明治3年華僑の登録人口が462名であったのが、明治10年に582名に増加した事と共に、華僑社会の熟成化した事を示すものであらうか。

なお、以上の事に関連して、蒲地氏が、明治3年と明治10年の登記簿を比較して目立つ事は、長崎の中国人口が全体として増加しているのに対して大浦・浪之平在住の人口が減少し、職業別では傭工の人口が減少している事、出身省別に見れば増加したのはおもに福建省および江蘇省である事とされている事は逸せられてなるまい(18)。氏は、以上の現象は大浦・浪之平の傭工人口の登記もれの結果なのか、またはこの地域の労働者人口の長崎からの転出の結果なのかよくわからないし、例えば後者の場合、彼らが、広東省人が中心に発展していった神戸、横浜の中華街へ移住していった事が考えられるが、証明し難いとされている(19)。

また、以上の事と共に蒲地氏が以下のような事を指摘して居られるのも長崎華僑社会の性格を考える場合逸してはならぬのではあるまいか。

氏は言われる、「明治時代、あたらしく形成された神戸および横浜の華僑社会に比して、長崎華僑の特徴は福建省人が圧倒的に多く、江蘇人・浙江人もかなり多かったこと、さらに労働人口にたいする商人人口の割合が大きかったことである。これらの特徴は、対中国

貿易における長崎の歴史的地位を反映しており、開港いらい長崎に定着した華僑と過去との強い連続性があったことを示している。」と(20)。

なお、行文の都合上、職業面、長崎華僑を含む長崎在外国人の動静について説明を省略した面があるので、それらをここで補足して置きたい。

幕末安政の開国とともに、各開港都市への華僑の進出が漸く顕著になったが、華僑の人達はまだ無条約国人であったため、外国商社の名を借るか、またはその使用人、買弁などとして進出する事を余儀なくされた。華僑が公然と貿易商として進出し得たのは明治4年(1871)の日華修好條規締結以後のことで、その第7条には「海岸、各港ニ於テ彼此共ニ場所ヲ指定シテ商民、往来貿易ヲ許スヘシ」と規定されていて、それによって華僑貿易商達は居留地外のいわゆる雑居地に居住の上、貿易に従事するに至った。この長崎的反映が上記、明治初期の人口動態などであるが、『長崎市制六十五史』の表現と借りると、「これら外国人は、はじめ大浦居留地に住居をかまえ、後に中国人は新地一帯に住み、ほかは大浦・浪之平の海岸地帯から東山手・南山手一帯に専住するようになった。……諸国人の来住するものが増加し、明治15年の調査によると長崎市在住の外国人総数八二九人……そのうちの大半の600余人が中国人でしめられ、ついでイギリスの90余人、フランス33人、アメリカ32人、その他ロシア・スウェーデン・オーストラリア等である。本市市制施行の明治22(1889)年には外人数も市人口の約2%にあたる1,055人<sup>筆者註</sup>(上記の表のように、この年、中国人は701人で、外人中の3分の2を占めている。)、同25(1892)年は中国貿易商を除く各国商館数35、世帯数116、家族307人を数えている」という(21)。

ついで、明治32(1899)年、条約改正による治外法権の撤廃と内地雑居令の公布により、貿易商以外の雑業者達の内地進出が許可され、内地雑居が公認されるに至った。未完

## 註

- (1) 岩波 『広辞苑』 P.415
- (2) 須山卓、日比野文夫、蔵居良造『華僑』改訂版 P.13~P.14 P.49 NHKブックス
- (3) 前掲書『華僑』改訂版 P.14
- (4) 藤堂明保編『学研漢和大辞典』P.96
- (5) 前掲書『華僑』P.3
- (6) 宇野哲人『中庸』昭和58年 P.60 講談社、簡野道明『字源』明治書院 P.856
- (7) 蒲地典子「明治初期の長崎華僑」お茶の水史学 第20号 昭和51年
- (8) 蒲地典子 前掲論文
- (9) 菱谷武平「唐館の解体と支那人居留地の形成—若干の古地図について(三)」1970年、「長崎外人居留地に於ける華僑進出の経緯について」1963年、「新長崎年表」下、『長崎市制六十五年史』、『長崎市制五十年史』、『長崎市郷土誌』大正7年などより合成せるもの
- (10) 蒲地典子 前掲論文
- (11) 山本紀綱『唐人屋敷』P.412 昭和58年
- (12)~(20) 蒲地典子 前掲論文
- (21)~(22) 『長崎市制六十五年史』

(昭和59年10月31日受理)